

国語科における古典教育の現状と課題

加藤直志

はじめに

筆者は、二〇一五年度より、日本近世文学会が「和本リテラシ」^①の普及を目指して行う出前授業に協力し、勤務校（名古屋大学教育学部附属中・高等学校）において、加藤弓枝・三宅宏幸とともに、くずし字による古典教育を試みてきた^②。

二〇二〇年度からは、山田和人を代表とする「古典教材の未来を切り拓く！」研究会へと発展させ、くずし字や和本を用いながら、古典への学習意欲を引き出せるような教材集の刊行を目指し、成果の蓄積をさらに進めているところである。本稿は、そのための出発点として、現在の日本の学校教育における、古典教育の現状と課題について論じたものである。なお、「古典教育」には、大学における古典教育や、社会人対象の各種の講座なども含むため、小学校・

中学校・高校における教育に限定するという意図で「国語科における」と冠した。

国語科教育における古典の位置づけについて把握するため、二〇二二年度より実施予定の新しい中学校学習指導要領の解説から、説の一部を引用する。総説には、全教科に関する大枠が述べられており、この箇所に関しては、小学校や高校の指導要領にもほぼ同じ文言が並んでいる。

「生きる力」をより具体化し、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力を、ア「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」、イ「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」、ウ「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生か

そうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養^{かんよう}」の三つの柱に整理するとともに、各教科等の目標や内容についても、この三つの柱に基づく再整理を図るよう提言がなされた。^③

次に、国語科における学習内容が、ここに記された三つの柱のどこに位置づけられているのかを述べた箇所も引用する。なお、「学びに向かう力・人間性等」については、具体的な指導事項に対応する形では取り上げられていない。

〔知識及び技能〕

- (1) 言葉の特徴や使い方に関する事項
- (2) 情報の扱い方に関する事項
- (3) 我が国の言語文化に関する事項

〔思考力、判断力、表現力等〕

- A 話すこと・聞くこと
- B 書くこと
- C 読むこと^④

これらのうち、いわゆる「古典」は、主として「知識及び技能」の「(3) 我が国の言語文化に関する事項」の中の「伝統的な言語文化」「言葉の由来や変化」という学習内容に位置づけられている。

以上を踏まえた上で、古典教育の現状と課題について論じたい。

近年、学会等で古典教育に関するシンポジウムが相次いで行われているが、高校の古典教育を中心に論じているものが多い。確かに、^⑤古典が独立した科目として存在し、扱う時間も高校が最大ではあるだろう。しかしながら、義務教育段階においても古典を学ぶ機会が存在している。そこで、本稿においては、小学校・中学校・高校のそれぞれについて順に取り上げていくこととする。

一、小学校における古典教育

小学校の古典教育の現状と課題について知るために、漢文教育からのものであるが、植山俊宏の発言を紹介する。

平成二十年告示学習指導要領において「伝統的な言語文化と国語の特質」の領域が新設され、小学校三年生段階から古典教育が推進されることになった。その完全実施から計算すると当時の小学校三年生は小学校で四年間、中学校で三年間の新しい漢文教育を受けたことになる。その成果が問われる時期になった。

結論からいうと、小学校段階は、授業時間数が確保されたところもあり、漢文に「親しませる」成果を挙げることができた。ところが、その成果は定着していないようで、進学した中学校における変化にむすびついていない。^⑥

小学校の古典教育は、一定の成果を出しつつも、未だ手探りの面がありそうだ。

教科書を分析しながら小学校の古典教育について論じたのが、菊川恵三である。

いくら声に出して楽しもうといっても、古典・文語文を数多く示すだけでは難しいだろう。そこには、小学生には内容は十分にわからなくてもよいとの考えがあるのだろうが、小学校も高学年になればそれだけではすままい。(中略) 光村図書 of 狂言「柿山伏」のように、「テキストだけでない古典へのアプローチが試みられてよい。」^⑦

「テキスト」を文語文と解すると、「テキストだけでない古典」として、芸能に加え、くずし字を含む絵巻や絵入り本、古典に関わるアニメといったものも選択肢になるのではないか。

小学校では、中学・高校に先駆けて、二〇二〇年度から新しい学習指導要領が実施されている。外国語やプログラミングが話題であるが、古典に関わる部分の学習目標・内容は【資料1】の通りである。第五学年及び第六学年の「言葉の由来や変化」について、指導要領解説は次のように述べている。

具体的には、仮名や漢字がどのように形成され、継承されてきたのかなどについて基本的な知識をもつこと、また、表音文字

【資料1】

文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編 平成29年7月』（東洋館出版社、2018年）第2章 国語科の目標及び内容

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
伝統的な言語文化	ア 昔話や神話・伝承などの読み聞かせを聞くなどして、我が国の伝統的な言語文化に親しむこと。 イ 長く親しまれている言葉遊びを通して、言葉の豊かさに気付くこと。	ア 易しい文語調の短歌や俳句を音読したり暗唱したりするなどして、言葉の響きやリズムに親しむこと。 イ 長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使うこと。	ア 親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章を音読するなどして、言葉の響きやリズムに親しむこと。 イ 古典について解説した文章を読んだり作品の内容の大体を知ったりすることを通して、昔の人のものの見方や感じ方を知ること。
言葉の由来や変化		ウ 漢字が、へんやつくりなどから構成されていることについて理解すること。	ウ 語句の由来などに関心をもつとともに、時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いに気付き、共通語と方言との違いを理解すること。また、仮名及び漢字の由来、特質などについて理解すること。

としての平仮名や片仮名、表意文字としての漢字の特質を理解すること、(中略)などである。⁹⁾

二〇二〇年度から実際に使用されている小学校の教科書を見ると、四社すべてが、万葉仮名からくずし字へとといった、文字の変遷について取り上げている。くずし字で書かれたうなぎ屋やそば屋の看板の写真を掲載している教科書や、くずし字と現代の平仮名との簡略な対応表を掲載している教科書もあり、小学校の学習内容にくずし字を紹介する単元が加わったと言える。¹⁰⁾

小学校の古典教育の現状を踏まえた課題についてまとめておく。少ない授業時間数で、古典への興味・関心を引き出す工夫として、音読や暗唱だけでなく、古典芸能の鑑賞や絵巻、絵入り本の教材化なども選択肢に加えてはどうか。絵巻や絵入り本を、くずし字を紹介する単元と関連付けて取り扱うことで、古典学習の出発点に立つばかりの小学生に「古典は面白そうだ」という印象を持ってもらえるようにしたい。しかしながら、教科書にくずし字が掲載されていても、指導する側が扱いに苦慮し、現場での評判が悪いと、次回の改訂でなくなることもあり得る。そうしないために、必ずしも国語(古典)を専門としているとは限らない、小学校の先生方をサポートできるような教材を提供できるとよい。小学校の古典教育は、歴史が浅い分、新しい風を吹き込めるところも多そうだ。

二、中学校における古典教育

中学校も二〇二二年度から、新しい学習指導要領が実施される予定である。小学校同様、古典に関わる部分の学習目標・内容を転載する【資料2】。教科書には、『竹取物語』『枕草子』『平家物語』『徒然草』『奥の細道』などの定番教材が並ぶ。文語文法として、歴史的仮名遣い・係り結び等を学ぶものの、現代語訳やそれに代わるような注釈がほとんどにおいて付けられており、中学生には、古文を自力で現代語に訳すことまでは求められてはいない。

一方、二〇二二年度から使われる予定の、すべての教科書見本(光村図書・三省堂・東京書籍・教育出版)を調査したが、小学校で登場したくずし字に関する単元は見られなかった。ただし、光村図書の書写の新しい教科書(見本)¹¹⁾には、「コラム 物語を千年書き継ぐ」というページが登場し、絵巻から冊子本、古活字本、注釈書、現代語訳など、『源氏物語』の享受史が書物の形態の変遷とともに紹介されている。後述するが、高校の教科書にも、くずし字に関する記述が掲載される可能性があり、中学校においても、書写との関連でくずし字にも触れておくという道を模索したい。

次に、中学校の古典教育において、興味深い実践例を紹介する。新崎昌代は、沖縄県の久米島西中学校二年生を対象として、久米島

【資料2】

文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編 平成29年7月』（東洋館出版社、2018年）第2章 国語科の目標及び内容

	第1学年	第2学年	第3学年
伝統的な言語文化	ア 音読に必要な文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読し、古典特有のリズムを通して、古典の世界に親しむこと。 イ 古典には様々な種類の作品があることを知ること。	ア 作品の特徴を生かして朗読するなどして、古典の世界に親しむこと。 イ 現代語訳や語注などを手掛かりに作品を読むことを通して、古典に表れたものの方や考え方を知ること。	ア 歴史的背景などに注意して古典を読むことを通して、その世界に親しむこと。 イ 長く親しまれている言葉や古典の一節を引用するなどして使うこと。
言葉の由来や変化	ウ 共通語と方言の果たす役割について理解すること。		ウ 時間の経過による言葉の変化や世代による言葉の違いについて理解すること。

国語科における古典教育の現状と課題

に関わる漢詩を読むという授業を行った際の、アンケート結果を表している。

事前アンケートでは「古典が好きですか」という問いに肯定的な回答は二四％である。しかし「久米島のが好きか」の肯定的な回答は七二％、さらに「久米島の古典作品を読んでみたか」の肯定的な回答は七二％であった¹²⁾。

離島という事情もあるかもしれないが、古典にさほど興味を示さない中学生たちであっても、地元のが書かれているものであれば読んでみたいと考えていることがわかる。新崎は、単元名を「久米島特産品PR大作戦！ 漢詩から褒め技を学ぼう」と名付け、「久米島上江州家の茶に託す漢詩」を読んだ後、久米島の特産品をPRする文の作成に生かすといった方向で授業を展開し、

古典の学びと自分の言語生活をつなげて生かせることを実感し、さらに他の古典作品を読むことへの意欲や自分の言語生活の中で生かせる場面の広がりを感じることができた¹³⁾。

と振り返っている。古典学習への意欲を引き出す工夫として非常に参考になる。とりわけ沖縄県においては、その歴史的事情も考慮すると、教科書教材とは別に、このような地域教材¹⁴⁾を用意する意義は大きい。PR文作成という方向性には種々の意見がありそうだが、これは「言語活動の充実」を意識したものと推測する。

ここで、「言語活動」が重要視されるに至る、二〇〇〇年前後からの国語科教育の動向について、間瀬茂夫の言を引きながら振り返っておく。二〇〇四年のいわゆるPISAショックを受け、「PISAが調査の対象とする能力が、従来の学力とは枠組みが異なることが明らかになる中で、教育改革は、基礎・基本から活用力へと学力育成の重点を転換した」(間瀬)。二〇〇七年以降、小学校六年生および中学校三年生を対象に実施されるようになった全国学力・学習状況調査においても「PISAで他国に見劣りした活用力を問うB問題が設定されたことが社会と学校現場に大きな影響を与え」(間瀬)、言語活動の重視を掲げた平成二十(二〇〇八)年版学習指導要領での「国語科における言語活動例の記載は、国語科授業の改善に一定の方向性を与えた」(間瀬)。高校国語科の科目再編や大学入学共通テストの導入も、この流れの延長上にあると考えられる。

中学校の古典教育の現状を踏まえた課題についてまとめておく。まず、「古典の学びと自分の言語生活をつなげ」(新崎)のような授業ができる、生徒の興味を惹きやすいというのは、筆者自身も感じている。身近な昔話、従来の概念では「文学」には入りにくいもの、例えば、筆者達を取り上げた葛飾北斎や、最近のアナビエ・ブームのほか、漢文では、日本漢文を取り上げるのもよいのではないか。現代との距離が比較的近く、文献資料が豊富に残されていたり、

そのことにより、地域教材が作りやすかったりする点では、近世のものから新しい古典教材が発掘できる可能性がある。授業時間数の制約はもちろんあるが、現代から、近代文語文や近世を経由して古代・中世へ、古代・中世の先行作品などを踏まえて、再度、近世・近現代(自身の言語生活)へという流れで教材を用意できると理想である。一方、中学校に限った問題ではないが、古典の学びが「言語活動の充実」ばかりに収斂されてしまわないかという危惧もある。「言語活動は指導事項を効果的に指導するためのものであり、活動することが目的ではない。」^⑮ことを自戒したい。

本節の後半では、PISA調査や学力テストについても言及した。これらの指標を学習指導の参考にするための必要性も理解できるが、そもそも、現代の日本人はランキングを過度に意識しすぎているからいもあるのではないか。この問題に限ったことではないが、現代社会の有り様そのものを相対化する視点を持つためにも、「死者の声を聞く」^⑰ということが、古典を読む意義として極めて重要であるはずだ。

三、高等学校における古典教育

高校についても、二〇二二年度から学年進行で実施される予定の新しい学習指導要領を参照するが、小学校・中学校のような学習内

【資料3】

文部科学省『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 国語編
平成30年7月』（東洋館出版社，2019年）第1章 総説

平成21年告示学習指導要領	平成30年告示学習指導要領
<p>【共通必修履修科目】 国語総合（4単位）</p>	<p>【共通必修履修科目】 現代の国語（2単位） 言語文化（2単位）</p>
<p>【選択科目】 国語表現（3単位） 現代文A（2単位） 現代文B（4単位） 古典A（2単位） 古典B（4単位）</p>	<p>【選択科目】 論理国語（4単位） 文学国語（4単位） 国語表現（4単位） 古典探究（4単位）</p>

（単位数は標準単位数）

容は省略し、現行指導要領との科目構成の対照表を転載するに留めたい【資料3】。小・中学校とは異なり、高校では各校で履修する学年や科目を選択して教育課程を作る。平成二十一（二〇〇九）年告示の現行の指導要領では、普通科では、一年生で国語総合を履修した後、二・三年生で現代文Bと古典Bを履修して大学受験に備えるという場合が一般的だろう。専門学科などでは、国語総合を履修

した後は、学校によって多岐に渡り、古典A・Bの授業を選択しない場合や、古典の授業を行う場合でも現代語訳を積極的に利用する場合もあるようだ。新指導要領については、「現代の国語」と「言語文化」、「論理国語」と「文学国語」という科目の立て方そのものは是非に加え、標準単位数の関係で、選択科目の配置が難しいといったこと（そのため、教育委員会等の判断で標準よりも単位数を減じる措置を認めるという動きも出てきているようだ）などが議論になっている。^⑧

次に、実際の授業がどのようになっているかを議論するため、一例として、『高等学校国語科授業実践報告集』古典編Ⅰ～Ⅲに収められる授業実践や講演録・座談会で取り上げられた教材とその数を参照してみる。古典編Ⅰ（『竹取物語』2、『伊勢物語』5、『土佐日記』1）、古典編Ⅱ（『平家物語』5、『大鏡』1、『源氏物語』5）、古典編Ⅲ（『徒然草』3、『枕草子』2、『更級日記』1、『奥の細道』2）。古文に関わる実践例等が27あるうち、中古17、中世8、近世2という内訳であり、中古が多く、近世が少ない点の特徴的である。筆者自身の経験も含めてだが、平安中期の文法で古文を読もうとするため、勢い中古の教材が増えるといった、これまでの古典教育の伝統がそのまま反映されていると思われる。また、大学入試への対応も考えると、『源氏物語』や『大鏡』の文体で古文を

読む訓練を積んでおけば近世の文章が出題されても対応できるが、その逆は難しいといった事情もあるだろう。個々の実践例の詳細については割愛するが、絵巻作りや挿絵の活用、朗読CDを作るなど、言語活動を重視したものが多い。

こういった方向性の一方で、多くの普通科高校にとっては、避けて通れないものとして、大学受験への対応がある。新入生を迎える四月は、種々のガイダンスや健康診断、体力測定などが入り、教科書がなかなか進まない。大型連休が明ける、五、六月ごろには、早速第一回目の高校一年生向け全国模試が待ち受ける。高一向けのやや平易な出題とはいえ、中学校と違い、原則として現代語訳が付かないため、受験した生徒は戸惑う（中学三年生で高校の内容を学び始める、私学の中高一貫校などは事情が異なるかもしれない）。すると、「高校でもつと受験指導に力を入れて欲しい」「予備校へ行かないと受験に対応できない」と不安に思う生徒や保護者も出てくる。そのため、模試の出題範囲に遅れを取るのではないよう、文法知識だけでも急いで詰め込もうとしたり、補習授業を行ったり、というのが現状ではないだろうか。高校三年生の一月、年明け早々に大学入学共通テストが実施されることから逆算すれば、このくらいのペースが求められるのも事実である。昨今の学校は、生徒も教員も忙しい。²¹⁾

このような状況下で行われている、高校の古典の授業に関して、日本学術会議が、次のような提言を行った。

古典嫌い・無関心を大量に作り出している主な要因は何か。それは教師側にも生徒側にも根強く存在する、品詞分解と現代語訳に終始する固定的で受動的な授業形態にある。このような押しつけの授業から抜け出す工夫をし、柔軟な発想を導入した改革が必須である。

大切なことは古典も含めた言語文化の世界が、自分とどのような関係を持っているのか、共通点・相違点を理解して、自己の世界観を拡大させることにある。²²⁾

筆者が中高生対象に行っている、古典に対する意識調査においても、文法などの暗記が嫌だから古典は嫌いだ、という回答は実際に見られる。²³⁾とはいえ、入試対策という側面を抜きにしても、文法の知識は、ある程度必要なものでもあろう。「ただ闇雲に暗記だけを強いる古典教育に陥らないよう、留意²⁴⁾しながら、「学習には苦勞が伴うものの、知識を身につけたことにより、現代語訳が付いていなくなったり、より高度で複雑であったりする文章でも読み解くことができる」という達成感を味わわせる²⁵⁾というのが、筆者が授業で心がけているところである。「文法という道具を上手に使うことが、正しい解釈につながる²⁶⁾」ということを丁寧²⁷⁾に解説するページを設けてい

る教科書もある。

それでもやはり、高校生にとって、動詞や助動詞の活用表などを暗記するのは負担には違いない。勝又基は言う。

文法的重要性は理解するものの、いわゆる助動詞の活用表を、全員が丸暗記する必要があるだろうか。私としては、一段下げ

て、「助動詞の活用表があれば文法が分かる」ということを達成目標にしてはどうかと思う。だから、高校内の定期テストでも、大学入試でも、つねに活用表を問題末に貼り付けてほしい。

知識を活用する力の育成、という昨今の教育課題にも合致しており、検討に値する意見として受け止めたい（ちなみに、名古屋大学の数学の入試問題には、重要公式集が付いている）。

さて、高校の新しい指導要領が大きな論争を呼んでいることはすでに触れたが、必修科目「言語文化」において、くずし字による古典教育との関わりで、注目すべき記述がある。(2) 我が国の言語文化に関する事項」の「○言葉の由来や変化、多様性」のE及びその解説を引用する。

エ 時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解すること。

(中略)

時間の経過による文字の変化については、まず中国から借りてきた漢字のみを用いて書くことから始まり、やがて漢字を省略したり崩したりした片仮名、平仮名を漢字とともに組み合わせるようになっていった。このことは文字だけに限らず、語彙や文体にも大きな変化をもたらした。

本稿執筆時点で「言語文化」の教科書の見本は公開されていないため未確認だが、小学校同様、くずし字に関する説明が入る可能性がある。注視したい。

本節をまとめる。すべての教材がそうである必要はないが、中学校のところで示した、現代の生活とのつながりも意識しながら、古典を読む意義を伝えたいという方向性は高校でも大切にしたい。高校では文語文法や古文単語などを詳しく学ぶため、その知識を生かせるような教材と、知識が不足している生徒でも興味を沸くような教材を組み合わせることができると理想的である。その上で、知識が増えることで古典を学ぶ意義についてより深い議論ができるようになることを実感させたい。筆者も、歌詞の理解に役立つ（高野辰之作詞・岡野貞一作曲「故郷」の「うさぎ追いしかの山」は、兎を追って鹿のいる山へ分け入る、のではない）とか、日本人が外国文化を器用に受容してきたことが窺える（漢語にサ変動詞「す」をつなげたように、「LINEする・LUNCHする」と器用に造語する）

といった例などに授業で言及するようにしている。

文法指導（あるいは出題）のあり方については、さらに議論が必要である。本稿では、主として古文の解釈に文法が役立つという視点で論じたが、文法そのものからの学びという視点においては、日本語学からの知見も求められよう。また、必ずしも大学受験を前提としない高校では、中学校のように、文法学習に深入りすることなく、現代語訳も利用しながらの授業が展開でき、今後の古典教育のあり方を探る上で、参考にできるところがありそうだ。

小学校に続き、高校の教科書でも、くずし字が紹介される可能性があるがあることも述べた。博物館や美術館で古典籍を見ても、現状の高校までの古典教育では、ほとんど読めないのが一般的である。教科書や出前授業などでくずし字に少し触れただけで、古典籍を読み解けるようになるのは難しいかもしれないが、たとえごくわずかであっても、実物を見て読める字を見つげることができると、片言の挨拶だけでも、通訳なしで外国人と意思疎通ができた時の、世界が広がるような嬉しさに似た喜びを感じられはしないだろうか。

おわりに

国語科における古典教育の現状と課題について、校種別にテーマを絞って論じてきた。まず、小学校の教科書にくずし字が紹介され

ていることを指摘した。中学校では、古典への学習意欲を喚起する工夫として、地域教材に注目するとともに、言語活動の充実が求められるに至る経緯にも言及した。高校では、平安中期の文法を学ぶことと連動して、中古の教材が多く取り上げられる傾向にあることを確認した上で、文法の扱い方についての問題提起を行った。さらに、高校でもくずし字を学ぶ可能性があることにも触れた。

これまでの実践における、アンケート調査の結果や筆者自身の手応えから、適切な教材さえ用意できれば、くずし字には、学習者の興味・関心を引き出す力があることがわかってきた。それを一過性のものに終わらせるのではなく、教科書を中心とした日常の学習にうまくつなげるためにはどうすべきかが、目下の課題である。本稿で論じてきた、古典教育の現状と課題を踏まえながら、新しい古典教材の開発に取り組んでいきたい。

益田勝実はかつてこう述べた。

いまほどのあらゆる価値の転換期に、どうして前代からの古典文学の目録どおりの継承がありえよう。教師はめいめいの文学の古典を求めて探索し、その探索の過程に学習者を同伴し、学習者も自己の古典をしだいに探すようになる。学校の古典文学教育は、古典再発見へのプロセスであり、プロセス以外ではない。古典があるから学習が開始されるのでなく、古典を求めて

学習がはじまる。²⁹⁾

一九七五年の発言であり、その後の状況の変化はあるだろうが、国語科教育が大きな転換期を迎えている今、「古典を求めて探索」することの重要性はいやがうえにも増している。諸氏と議論しながら、今後の古典教育のあり方について模索し続けていきたい。

注

- ① 日本近世文学会は、「和本リテラシー」を「広い意味では、江戸時代末までに書写もしくは刊行された古典籍（和本）をどう読み、理解し、そして活用していくかといった、日本古典籍に関わる総合的な能力を指す（中略）狭い意味では、いわゆる「くずし字」（変体仮名）の読解能力を指します。」と定義している（日本近世文学会『和本リテラシーニューズ』Vol.1、二〇一五年七月）。
- ② 加藤直志・加藤弓枝・三宅宏幸「くずし字による古典教育の試み——日本近世文学会による出前授業——」（名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要）第六十一集、二〇一六年十二月、「くずし字による古典教育の試み(2)——江戸時代の「ざるかに合戦」を読む——」（同第六十二集、二〇一八年三月）、「くずし字による古典教育の試み(3)——高校生と読む「北斎だるせん」——」（同第六十三集、二〇一八年十二月）、「くずし字による古典教育の試み(4)——教科書教材としての『百人一首』から『歌道化百人一首』へ——」（同第六十四集、二〇一九年十二月）、「くずし字による古典教育の試み(5)——江戸時代の「桃太郎」を読む・補遺——」（同第六十五集、二〇二二年一月）。
- ③ 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編 平

成29年7月』（東洋館出版社、二〇一八年、第1章 総説）。

④ 注③に同じ。ただし、これらは「相互に関連し合いながら育成される必要がある。」（注③に同じ）とある。

⑤ 和歌文学会第六十一回大会 学会創立六十周年記念シンポジウム「和歌を学び、教えるということ」（二〇一五年十月十日、於・岡山大学、『和歌文学研究』第一二二号（二〇一六年六月）に掲載、明星大学日本文学科学科公開シンポジウム「古典は本当に必要なのか」（二〇一九年一月十四日、於・明星大学、勝又基編『古典は本当に必要なのか、否定論者と議論して本気で考えてみた。』（文学通信、二〇一九年に掲載）、二〇一九年度中古文学会秋季大会シンポジウム「中古文学と学習指導要領の改訂」（同年十月十二日に予定されていたが台風のため中止、『中古文学』第一〇五号（二〇二〇年五月）に掲載）、二〇二〇年度同春季大会オンラインシンポジウム「文学研究と国語教育の未来を拓く」（同年五月二十四日、『中古文学』第一〇六号（二〇二〇年十一月）に掲載）、同秋季大会オンラインシンポジウム「これからの古典教育を考える」（同年十月十七日）など。

⑥ 植山俊宏「鼎談報告——新たな岐路に立つ漢文教育を考える——」（渡邊春美・札埜和男・三上英司・植山俊宏・谷口匡「鼎談 新学習指導要領後の漢文教育と教員養成」『新しい漢字漢文教育』第七十号、二〇二〇年六月）。

⑦ 菊川恵三「小・中学校教科書と万葉集」（梶川信行編『おかしなぞ！国語教科書 古すぎる万葉集の読み方』笠間書院、二〇一六年）。

⑧ 例えば、筆者達の「くずし字による古典教育の試み」（注②に同じ）も絵入り本を用いて、古典に親しむことを目指した試みの一つと位置づけられよう。

⑨ 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編 平

成29年7月」(第3章 各学年の内容 第3節 第5学年及び第6学年の内容)。

- ⑩ 各教科書の内容、くずし字を紹介した単元名を挙げておく。「仮名の由来」(甲斐陸明ほか『国語六 創造』光村図書、「日本の文字」(秋田喜代美ほか『新しい国語 六』東京書籍)、「日本語の文字」(田近海一ほか『ひろがる言葉 小学国語 六下』教育出版)、「日本語の文字の歴史」(鶴田清司ほか『みんなと学ぶ 小学校国語 五年下』学校図書)。
- ⑪ 宮澤正明ほか『中学書写 一・二・三年』(光村図書 令和3年度版見本)。
- ⑫ 新崎昌代「古典を主体的に読む力を育成する授業の工夫——地域教材「久米島上江州家の茶に託す漢詩」の活用を通して——」(『月刊国語教育研究』第五八〇号、二〇二〇年八月)。
- ⑬ 注⑫に同じ。
- ⑭ 筆者達も、「くずし字による古典教育の試み(3)」(注②前掲)において、名古屋の地域教材として、葛飾北斎が名古屋滞在中に大きなだるま絵を描いた際の記録を取り上げた。
- ⑮ 間瀬茂夫「第1節 教育改革と国語科教育の課題」(全国大学国語教育学会編『国語科教育を問いなおす』東洋館出版社、二〇二〇年六月、第3章)。
- ⑯ 富山哲也「46 言語活動の充実」(高木まさき・寺井正憲・中村敦雄・山元隆春編著『国語科重要用語事典』明治図書出版、二〇一五年)。
- ⑰ 塩村耕「江戸人の教養——生きた、見た、書いた。」(水曜社、二〇二〇年)。
- ⑱ 紅野謙介「国語教育の危機——大学入学共通テストと新学習指導要領」(筑摩書房、二〇一八年)を嚆矢とし、多くの雑誌・新聞などが特集を組むなど、論争となっている。

⑲ 明治書院編・全国高等学校国語教育研究連合会協力『高等学校国語科授業実践報告集 古典編Ⅰ～Ⅲ』(いずれも、明治書院、二〇一四年)。

- ⑳ 例えば、河合塾系の全統高一模試は、第一回を五月中旬～下旬に実施予定とある(<https://www.kawai-juku.ac.jp/highschool/zeno/early/> 二〇二〇年九月二日閲覧)。
- ㉑ 受験への対応だけに限らず、教員の業務が多忙化し、問題になっている。内田良・斉藤ひでみ編著『教師のブラック残業 定額働かせ放題』を強いる給特法とは?!』(学陽書房、二〇一八年)など参照。
- ㉒ 日本学術会議(言語・文学委員会 古典文化と言語分科会)「提言 高校国語教育の改善に向けて」(二〇二〇年六月三十日) (<http://www.sci.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-24+290-7.pdf> 二〇二〇年九月三日閲覧)。
- ㉓ 「くずし字による古典教育の試み(3)」、「同(4)」(注②前掲)。
- ㉔ 「くずし字による古典教育の試み(4)」(注②前掲)。
- ㉕ 「くずし字による古典教育の試み(3)」(注②前掲)。
- ㉖ 中刈正堯・岩崎昇一ほか『高等学校国語総合 古典編 改訂版』(三省堂、二〇一七年度見本)「文法から解釈へ① 用言」。
- ㉗ 勝又基「Part.2 古典に何が突きつけられたのか」(『古典は本当に必要なのか、否定論者と議論して本気で考えてみた。』(注⑤前掲))
- ㉘ 文部科学省「高等学校学習指導要領 平成30年告示」解説 国語編 平成30年7月(東洋館出版社、二〇一九年)。なお、引用文中のゴシック体は原文のままである。
- ㉙ 益田勝実「古典文学教育でいまなにが問題なのか」(『益田勝実の仕事 5 国語教育論集成』ちくま学芸文庫、二〇〇六年、初出は『季刊文芸教育』十四、一九七五年四月)。

※本稿は、「古典教材の未来を切り拓く！」研究会 第一回 オンライン研究会（二〇二〇年九月十三日）における口頭発表をもとにしている。また、本研究は、JSPS科研究費「P20H00792」ならびに20K00326の助成を受けている。

※口頭発表の際には、筆者の勤務校で使用している教科書等を例に、所収古典教材の一覧表を添付したが、紙幅の都合から割愛した。近年の教科書所収古典教材については、小金澤豊「新学習指導要領における小学校教科書古典教材及び漢字教材」（『新しい漢字漢文教育』第七十一号、二〇二〇年十二月）、須藤敬「二〇一六年度 中学校・高等学校国語教科書採録 中世文学作品一覧」（松尾葦江編『ともに読む古典 中世文学編』笠間書院、二〇一七年）、梶川信行・野口恵子・佐藤織衣・鈴木雅裕・佐藤愛「高校「国語総合」の教科書、全二十三種を徹底解剖」（『おかしなぞ！ 国語教科書 古すぎる万葉集の読み方』（注⑦前掲））など参照。